

琉球大学学術リポジトリ

《英語科》質の高いコミュニケーション能力の育成
(3年次) :
アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた深い学
びにつながる授業実践を通して

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属中学校 公開日: 2020-06-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本, 耕司, 上原, 明子, 大城, 賢 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/46012

質の高いコミュニケーション能力の育成（3年次）

ーアクティブ・ラーニングの視点を取り入れた深い学びにつながる授業実践を通してー

山本耕司* 上原明子* 大城賢**

*琉球大学教育学部附属中学校 **琉球大学教育学部

I 主題設定の理由

1 社会的背景から

グローバル化のさらなる発展やAI（人工知能）など最新技術の飛躍的な変化を受け、新学習指導要領では、新しい時代に必要となる資質・能力を育成するとしている。この将来の予測が難しい、変化の激しい社会で求められる資質・能力は、次の3つの柱で構成されている。「①生きて働く『知識・技能』の習得」「②未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力等』の育成」「③学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力・人間性等』の涵養」である。学んだ知識や技能を再生するだけではなく、さまざまな知識を組み合わせることで考え、主体的に問題解決に取り組むことができるような力が求められている^①。

また、新学習指導要領(2017)の、中学校外国語目標には、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を育成することを旨とする」^②と述べられている。

2 これまでの研究から

本校英語科では、2年間「質の高いコミュニケーション能力の育成ーアクティブ・ラーニングを取り入れた授業実践を通してー」というテーマで研究を進めてきた。

昨年度の研究の成果は、深く考えさせるための単元構想においては、目的を明確にした対話活動を取り入れる中で、「情報獲得を促す対話」を普段の授業で行い、「考えを広げ深める対話」についてはジグソー学習を取り入れた授業づくりを行った。その結果、それぞれ

の学年において、「単元を貫いたゴール BIG QUESTION」に向かって、単元全体を通してインプットや小さなアウトプットを積み上げ、単元末で行ったジグソー学習で得たことなどを生かして、パフォーマンステストにおけるアウトプットにつなげることができた。

課題としては、対話活動を取り入れていく中で、生徒同士の英語によるやりとりの場面設定が挙げられた。生徒による「思考」をみとり、教師による適切な「発問」を活動の中に入れていくことで、さらに対話を充実させ、その中で、生徒同士による気づきを引き出していく工夫が必要である^③。

そこで今年度は、深く考えた結果、外化された成果物を評価するだけではなく、思考過程に視点をおいた評価を追求し、本校英語科の目指している「質の高いコミュニケーション能力」をみとる単元構想及びルーブリック等の作成について研究を進める。

II 本研究の目的

アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた深い学びにつながる授業実践を通して、質の高いコミュニケーション能力の育成を図ることを目的とする。

III 目指す生徒像

内容のつながりを意識して、自分の考えや気持ちを、目的や場面、状況にふさわしい表現を用いて伝えることができる生徒。

IV 研究内容

本校英語科では、3年間の研究を以下のように計画している(表1)。研究3年次の今年度は、過去2年間の研究を踏まえて、授業実践の充実及び本研究のまとめに重点を置き、研究を進める。

表1 3年間の研究計画

1年次	・英語科における「思考力」の定義 ・「質の高いコミュニケーション能力」の定義 ・アクティブ・ラーニングを取り入れた授業実践の検討
2年次	・アクティブ・ラーニングを取り入れた授業実践の改善 ・深く考えるための単元構想 ・学習評価の検討
3年次	・アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた深い学びにつながる授業実践の充実 ・本研究のまとめ

1 「深い学び」と「見方・考え方」

「深い学び」と「見方・考え方」の関係について、「答申」(2016)には、『アクティブ・ラーニング』の視点においては、深まりを欠くと表面的な活動に陥ってしまうといった失敗例も報告されており、『深い学び』の視点は極めて重要である。学びの『深まり』の鍵となるものとして、全ての教科等で整理されているのが(中略)、各教科等の特質に応じた『見方・考え方』である。今後の授業改善においては、この『見方・考え方』が極めて重要になってくると考えられる⁽⁴⁾と述べられている。

(1) 外国語によるコミュニケーションにおける「見方・考え方」

「答申」(2016)では、外国語科での「見方・考え方」を踏まえて、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」として、以下のように整理されている⁽⁵⁾。

- 外国語で表現し伝え合うため、
- 外国語やその背景にある文化を、
- 社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、
- コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じて、情報や自分の考えなどを形成、整理、再構築すること。

また、管(2017)は、端的に「状況や相手に合わせて、総合的に考え、臨機応変に対応できるようにすること」とまとめている⁽⁶⁾。そのためには、国際理解や人権尊重の観点から、相手や相手の文化を尊重し、相手を気遣

い、相手との良好な関係を保ちながらも、自分の思いや考えを的確に伝えていくことが求められている。このことは、本校英語科が目指している質の高いコミュニケーションの定義や、目指す生徒像に合致する。

(2) 単元レベルでの「見方・考え方」の設定

「中学校学習指導要領解説 外国語編」(2017)には、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」と授業改善について次のように記述されている。

単元など内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること。その際、具体的な課題を設定し、生徒が外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせながら、コミュニケーションの目的や場面、状況などを意識して活動を行い、英語の音声や語彙、表現、文法の知識を五つの領域における実際のコミュニケーションにおいて活用する学習の充実を図ること⁽⁷⁾。

そこで本校英語科では、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」の構造を整理し、単元レベルで働かせる「見方・考え方」を設定している。

2 英語科における授業・学習評価の充実

生徒が学びを実感し、次の学びに対して目的をもって主体的に取り組み、継続させ、スパイラルに学習を積み重ねることで最終的な目標へと近づくと考える。今研究においては、特に単元構想の共有と生徒の学びの自覚に視点を置くことで、生徒にとっては主体的な学びを生み、教師にとっては指導実践と改善にあたる「CAN-DO Check sheet」の活用に取り組んでいる。

(1) 生徒との単元構想の共有「CAN-DO Check sheet」

① 「単元構想の共有」の必要性

生徒にとって主体的な学びとしていくために、生徒自身が見通しをもって学習に取り組み、自己の学習を振り返って次につなげていくことが重要である。事前に計画した単元構想案によって明確になった単元を貫いたゴール(以下、BIG QUESTION)や単位時間の学習課題(Today's Can-do)や評価基準などを、生徒と共有する。生徒と共有の仕方については、単元全体を通して使用する一枚の「CAN-DO Check sheet」の形で明示したり、単位時間ごとのワークシートなどに明示したり、黒板に明示している。

② 「学びを自覚すること」の必要性

「CAN-DO Check sheet」は単元の構想を生徒と共有する手立てとして効果的であると同時に、生徒が自身の「学びを自覚すること」を促す上で効果的だと考える。

「学びを自覚すること」とは、生徒が主体的に諸問題を課題化し、解決していくような学びの過程をメタ認知し、自己効力感を持つことである。また、「学びを自覚すること」とは、「自らの変容を自覚すること」にもつながる。「変容」とは1単位時間や単元、年間の学習における生徒の変化、考えの変化のことである。「変容を自覚すること」はその変化がどうして起きたのか、その過程に気づくことで、さらに主体的に学習に励むことが期待される。外国語科の特性により、生徒は徐々に言語材料が身につく、スパイラルに学習を積み重ねることで、使える英語も増えていく。そのため、年間や単元を見通して計画的にフィードバックを取り入れ、自らの変化を自覚させることが大切だと考える。

また、単元ごとに1枚のシートを作成し、学びを自分のことばで表現させることで、学びを生徒自身が自覚するとともに、教師も自身の指導がどうであったか生徒の言葉を通して確認できるようにしたいと考える。そこで、生徒の変容を視覚的に記し残すことで学びの自覚を促すものとして効果的な「CAN-DO Check sheet」の活用を行っている。

③ 「CAN-DO Check sheet」の活用

上記で述べてきた通り、①単元の構想と最終的な活動を生徒と共有することで生徒の自発的な学習意欲を図る、②自分の変容に気づかせることにより、自らの学びを自覚させる、といった視点を持って作成した。

ア 単元学習前の自己表現（考え）

単元の学習に入る前の段階で、その単元の BIG QUESTION に関するテーマを与え、表現活動（またはテーマに関する事前の考えの記入）に取り組ませる。この時点では、「できない」「うまくいかない」という気持ちを持つことも、この単元での学習意欲につながると考える。

イ 単元学習後の自己表現（考え）

単元の学習の最終段階において、表現活動（またはテーマに関する事後の考えの記入）に取り組ませる。学習前に取り組んだ表現活動と全く同じテーマの場合もあれば類似したテーマの場合もあるが、どちらにし

ても単元を通して学んできたことによる表現のふくらみや変化を実感させることができる。学習前後におけるそれぞれの自己表現を比較すると、習得した新言語材料の活用も見られ、学びによる成長を生徒自身が実感できるものとなる。

ウ 単元全体の流れとパフォーマンス課題の提示

その単元の学習のたまかな流れとともに、ゴールの表現活動を提示する。それらを単元の学習に入る前に提示することで、習得の段階においてもその先にある表現活動を意識しながら、主体的に取り組ませることができる。

エ 生徒の学びのまとめ

毎時間の学びを自分の言葉で表現させる。これにより、生徒が自分の学びを振り返ることができると同時に、教師も生徒の言葉を通して、生徒の学びを確認し、教師自身の指導がどうであったかを確認しながら評価をすることで、指導と評価の一体化を実践することができる。

(2) パフォーマンス課題とルーブリック

「外国語を用いて何ができるようになるのか」という視点から単元全体を見通し、単元計画と年間の到達目標とが有機的につながるよう、単元・年間を通して「聞くこと」「話すこと（やりとり）」「話すこと（発表）」「読むこと」「書くこと」について、全ての観点から総合的に評価することが大切である。知識を「知っている」だけでなく、「使える」力までつけたいと考えると、評価方法は「知識を測るペーパーテスト」だけでは不十分であり、知識やスキルを状況において使うパフォーマンスを評価することが必要になる。

パフォーマンス課題とは幅広く、「エッセイ」「レポート」「作品の制作」「プレゼンテーション」「ディベート」等、様々な形態が考えられる。

パフォーマンス課題は、「BIG QUESTION」に関連させて設定することを目指し、生徒にとって思考する必然性があるものとなるように留意している。なお、パフォーマンス課題を作る際には、前年度研究と同様、西岡(2016)を参考に作成している。

また、本研究においては、単元構想の「期待する姿」に基づきながら、ルーブリックを作成している。このルーブリックは、生徒に示し、目指す姿を生徒と教師が共有して授業に臨めるようにしている。

V 授業実践

1 1学年実践事例「人を紹介しよう」

(1) 主題

My Project 2 人を紹介しよう

(SUNSHINE ENGLISH COURSE 1 開隆堂)

(2) 目標

対話的な学びの中から、「好きな人を効果的にプレゼンする方法」への考えを深め、聞き手を意識した表現をすることができる。さらに、質問を加えることで相手とより良い関係が築けるような英語表現を身につけることができるようにする。

(3) 本実践の目的

好きな人について、事実や自分の気持ちを伝えたり、相手からの質問に答えたりすることで、コミュニケーション能力の質をあげることをねらいとした。質問などを加えた即興のやりとりには、難しさを感じている生徒も多い。聞き手を意識した表現を考え、さらに相手とよりよい関係を築けるような英語表現ができるように導きたい。最終的には、スピーチパフォーマンスの中で、即興でやり取りする力を身に付けさせることを目標とし、単元計画を立てた(表2)。

表2 単元計画

単元を貫くゴール BIG QUESTION 「好きな人を効果的にプレゼンする方法は？」	
	学習内容及び思考を誘う問いかけ Can-Do
第1時	モデル文の内容確認 「2つの紹介文の良い点は何だろう？」
第2時	事前活動: 紹介文作成①及びエキスパート活動 ①「より良い人物紹介にするには?①」
第3時 (前時)	エキスパート活動②〜クロストーク 「より良い人物紹介にするには?②」
第4時 (本時)	グループで学び合い 「好きな人を効果的にプレゼンしよう！」
第5時 (次時)	事後活動: 紹介文再構成 「紹介文の質をあげよう！」
この後	パフォーマンステスト 「キーワードを頼りに好きな人物を紹介しよう！」

(4) 実践内容

① 単元で働かせる「見方・考え方」

英語でのコミュニケーションを豊かにするために、自分の好きな人のことを、相手を意識し、より効果的に伝えることに着目し、まとまりのある英文で表現する。

② 単元における「学習課題」BIG QUESTION(BQ)

BIG QUESTION に対する解を、仲間と話し合い、思考しながら考えを深めていく。知識構成型ジグソー法やグループ活動を通して、BQ を意識しながら思考(学び)を重ね、より良い解に向かっていく。最終的には自分の考えで紹介文を再構成し、質の高い表現に繋げていく授業実践を試みた。

本単元の最後に生徒が上記の課題に対して、話せるようになって欲しい期待する解は次の通りである。

期待する解:

Hello, everyone. Do you know this cute girl? She is my childhood friend, Momoka. She loves animals. Do you have any pets? She has a dog. Her dog's name is Hacchi. She is kind to animals and friends. I like her very much. She is my best friend.

その際、質の高いコミュニケーションのポイントは次の通りである。

Aの要素: グループでのやりとりやアドバイスを参考に自分の考えを深めている。

- ①つながりのある7文以上の量で紹介している。
- ②特徴や性格など魅力が伝わる内容である。
- ③人物に対する自分の気持ちや思いが入っている。
- ④クラスメイトが聴いても分かりやすい内容である。

*10文程度の文章で構成しているが、上記の要素がほとんどない場合はB。

③ パフォーマンス課題

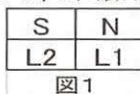
事後活動で行うパフォーマンス課題『好きな人についてまとまりのある英文で表現できる』を与え、以下に示すルーブリックを事前に提示確認し、その観点に基づいて評価した(表3)。1年生の段階では、正確さより流暢さに重きを置き、「伝えたい思い」を大切にルーブリックの作成を行った。

表3 パフォーマンステストにおけるルーブリック

Categories(項目)	Point	Criteria(評価基準)
流暢さ&内容 (7) ・ contents ・ smoothness	7	スピーチは初めから終わりまでスムーズに続き、伝達する内容も十分だった。
	5	スピーチはおおむねスムーズに続いたが、伝達する内容が一部不十分(80%)だった。
	3	スピーチ中に時々沈黙があり、伝達する内容が不十分(50%)だった。
	1	スピーチが続かなかった。伝達する内容も不十分だった。
正確さ(4) ・ 文法 grammar ・ 語彙 vocabulary ・ 発音 pronunciation	4	適切な発音でスピーチができ、語彙の選択や文法も間違いがなかった。
	3	適切な発音でスピーチができたが、語彙の選択や文法に少し間違いがあった。(80%)
	2	発音にいくつか誤りがあり、語彙の選択や文法にもいくつか間違いがあったが、言っていることは理解できた。(50%)
	1	発音、語彙の選択、文法に誤りがあり、言っていることが理解できなかった。
態度(3) attitude アイコンタクト・姿勢 写真の提示の仕方 声の大きさ、積極性	3	相手の方をしっかりと見て、相手に分かるように写真を見せ、十分な声で積極的に会話できた。
	2	アイコンタクトや姿勢、写真の提示の仕方は普通であったが、声が小さかったり積極性に欠けたりした。
	1	アイコンタクトがあまりなく、声が小さかった。積極性に欠けた。
Q&A コミュニケーション・ストラ テジー(3) (opener, rejoinders, closer, 始めや終わりの 挨拶など)	3	質問に対してプラス1文で応答 rejoinders したり、Opener (始めのあいさつ)、closer (終わりのあいさつ)などを適切に使うことができた。
	2	質問への応答 rejoinders や Opener, shadowing, closer などが80%くらい使えた。
	1	質問への応答やコミュニケーション・ストラテジーがほとんど使えなかった。

④ グループ活動（思考・判断）

本時では、4人グループでの学び合いの場を設定した。友達の考えを聞いたり質問される活動を通して、考えが広がったり焦点化されることをねらいとしている。図1のように、4人グループで、発表者(S)、聞き手(L1, L2)、記録(N)に分かれ、発表者が発表する。聞き手は、発表者に対してあいづちを打ちながら聞き、質問をする。記録は、発表者のスピーチ内容を評価表にメモする。聞き手は、最後にコメントメモを記入し発表者へフィードバックする。役割を変えて、4回繰り返す。



⑤ 取り組みの工夫（帯活動）

④のグループ活動で、生徒が即興で質疑応答ができるように次のような帯活動を継続して取り組んできた。また、相手が話す内容に意識を向け、さらに相手とのより良い人間関係を築けるような質の高いコミュニケーション能力の育成につなげたいと考え、取り組んだ。

1 minute chat 最近の出来事を30秒～1分程度、ペアで話をする。時計回りに座席を移動しペアを変えて再度話をする。

small talk 1分間のフリートークを行う。その際、reaction words, shadowing, Question, +1 sentence, など会話を繋げコミュニケーションを図ることを意識させる。

(5) 実践の考察

① 授業前後の変容（ワークシートから）

生徒の事前のスピーチ原稿と、ジグソー活動後の原稿を、ワークシートの記述をもとに比較する。以下は、3名の生徒の変容である（表4）。

表4 スピーチ原稿（授業前後）

生徒	授業前後の生徒の記述（原文ママ）
生徒A	【事前】 Hello, everyone. Look at this picture. Do you know her? She is a voice actress. She is cheerful. I respect her.
	【事後】 Hello, everyone. Look at this picture. Do you know her? Her name is Masako Nozawa. She is a voice actress. She is cheerful. I study her voice. Because I respect her. Thank you for listening. 【工夫した点】 ・ 問いかけを入れて相手をひきつけやすくした。 ・ 自分のおとも相手のことと関係させて書いた。
生徒	【事前】 Hi everyone. Do you know funny her? Her name is

生徒B
Imoto Ayako. She is a rare animals hunter. She's on ItteQ. She is from Tottori. She is an Amuro Namie fan. But she doesn't like snake. Thank you for listening.

【事後】

Hello, everyone. Do you know ItteQ? She's on ItteQ. Do you know this woman? Her name is Imoto Ayako. She is from Tottori. She is a rare animals hunter. But she doesn't like snake. She loves Amuro Namie very much. She is an Amuro Namie fan. She has met Amuro Namie. I like Imoto very much. Thank you for listening.

【工夫した点】

グループでの発表でもらったアドバイスから疑問文を投げかけた後に紹介を入れた。話題をあまりちらばせないようにした。

事前活動では、紹介する人物の情報の羅列になりがちな構成が多くの子に見られた。また、その人に対する思いまで伝える記述も少なかった。授業後には、全員が聞き手を意識した文章構成を工夫した点で挙げている。本授業のねらいでもある「相手のことを考えたコミュニケーション能力」という視点では成果と捉えたい。

② 授業デザインの振り返り

自分の好きな人のことを、相手を意識し、より効果的に伝えるために、文構造を意識したり、問いかけを入れたりするなど、友達のアドバイスを参考にしながら、自分の力でまとめ上げることができた。

最終的には、スピーチパフォーマンスの中で、即興でやり取りする事に対しても、8割の生徒が満足した回答をした上で、「もっと上手になりたい」という前向きな姿勢も多く見られた。今回の実践から、今年度のテーマである「質の高いコミュニケーション能力の育成」において、一定の成果が見られた。

③ 実践を踏まえた授業の改善点

帯活動として定期的にペアでのQ&Aや1分間のフリートークなどで、リアクションやプラス1文での応答を行っていたため、生徒の振り返りでも満足した回答が多かったが、一方で、やりとりの内容を英語で記載できない生徒が半数近くいた。「話すこと」よりも「書くこと」に苦手意識をもっている生徒が多くいる。また、伝えたいことをアウトプットする力と習得している語彙数に差があり、もどかしさを感じている生徒もいた。教科としての英語学習を始めて間もない時期でもあるので、今後、「書くこと」を含めた「表現すること」にも自信が持てるような指導の工夫をしていきたい。また、小中連携をさらに推進し、「やり取り」を含

めた5領域を意識した取り組みを、今後も工夫実践していきたい。

2 3 学年実践事例

(1) 主題

PROGRAM7 What Is the Most Important Thing to You?(SUNSHINE ENGLISH COURSE 3 開隆堂)

(2) 目標

社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことについて、考えたことや感じたこと、その理由などを、簡単な語句や文を用いて書くことができるようにする。

(3) 本実践の目的

本単元は、国際協力師として活躍する山本敏晴氏の活動を追い、代表を務める「NPO 法人宇宙船地球号」の取り組みの一つとして取り上げられている「お絵かきイベント」を通して、子どもの視点から国際協力について考えることができる題材となっている。言語材料としては、関係代名詞(主格)があり、教科書の本文と共に学習を進める。特にこのプログラムでは、国際協力におけるボランティアの意義について考えさせ、自分にできるボランティアについて考えを深めさせていきたいと考えた。(表5)。

表5 単元計画

単元を貫くゴール Big Question 「#2年後の夏 あなたはどこに立っている？」	
学習内容及び思考を誘う問いかけ Can-Do	
第1時 ～ 5時	事前アンケート:「来るべき東京2020にどんなボランティアができそうですか？」 教科書の本文内容、文法事項の学習
第6時 (前時)	山本敏晴さんの活動の意義について、今自分にできることを考える。
第7時 (本時)	ボランティアへの考えを深め、自分にできることについて英文を書く準備ができる。
第8時 (次時)	事後活動:「私のできるボランティアについて」 まとまりのある英文で表現する。
この後	(中学校卒業までに) 社会問題への基盤形成

(4) 実践内容

① 単元で働かせる「見方・考え方」

英語で表現し伝え合うため、国際協力におけるボランティアの意義を考えながら、「東京2020」における相手本位に立った「おもてなし」の心のこもった、自分にできるボランティアについての考えを述べる。

② 単元における「学習課題」(BIG QUESTION)

Big Question「#2年後の夏 あなたはどこに立っている？」に対する解を、仲間と話し合い、思考しながら考えていくために、ペアやグループ活動を中心に取り入れ、意見交流を通して、考えを深めていく学習を計画した。

本時の最後に生徒が上記の課題に対して、書けるようになって欲しい期待する解は次の通りである。

期待する解:

(O)I want to be a ceremony staff.

(R)Because I want to support the athletes and help the staff to give medals to them.

(E)I try my best to learn English hard, and have to communicate with many people who are from many countries. I want to make people happy. So I will serve people with a smile. I will make an effort to give a message with both Japanese “Omedetougouzaimasu” and English “Congratulations” to the medalists.

(O)I have never done volunteer work. So I am going to learn about the Olympics deeply.

③ ペア・グループ活動(思考・判断)

本単元では、Today's CAN-DOを『「東京2020大会」のためにあなたができるボランティアについて英文を書く準備ができる』と設定した。

最初の活動では、「Task1:自分が応募したい活動分野及びその理由」を考え、「Task2:どのような工夫をするか」について個人で考えた後に、ペアやグループで共有した。Task2では、スタッフ長になった設定で、『他のスタッフにどんな工夫をするように指示するか』という問いに、それぞれがマッピングを作成した。教師は、各活動の進め方の指示や注意事項、会話のやりとりのモデルをALTと示す等を行った。

④ グループ活動(表現)

次の活動では、グループごとに意見交流を行った。その際には、事前に提示した useful expressions を活用しながら、4分ごとにローテーションをしながら英語による意見交換を3セット行った。最後に元のグループに戻り、それまでの話し合いで得た情報を共有し、個別でそれぞれの考えをまとめた。教師は、特に工夫する点の話し合いが進むような声かけや、英語でまとめる際の手助け等を行った。

⑤ パフォーマンステスト(書くこと)

事後の単元テスト時におけるライティングテストにおいて、パフォーマンス課題『「東京2020大会」のためにあなたができることについて、関係代名詞を用い

た文を1文以上含む、7文以上の英文を書くことができる』を与え、以下に示すルーブリックに基づいて評価した(表6)。

表6 ライティングテストにおけるルーブリック

ライティングテスト				
5	4	3	2	1
A		B	C	
自分が応募したいボランティアについて、なぜそれを選んだかの理由と、自分ができること、具体的な説明を含めた関係代名詞を用いた文を含む、全部で7文以上の英文で書くことができる。	自分が応募したいボランティアについて、なぜそれを選んだかの理由と、その簡単な説明を含めた関係代名詞を用いた文を含む、7文程度の英文で書くことができる。	自分が応募したいボランティアについて、なぜそれを選んだかの理由と、その簡単な説明を含めた6文程度の英文で書いている。	自分が応募したいボランティアについて、なぜそれを選んだかの理由と、その簡単な説明を含めた5文程度の英文で書いている。 <u>関係代名詞の文なし</u> 。	自分が応募したいボランティアについて、なぜそれを選んだかの理由が書けず、その簡単な説明を含む、5文程度の英文も書くことができない。 <u>関係代名詞の文なし</u> 。

be near the athletes. For that I'll make many efforts. For example, I'll try to keep a smile, and I'll give medals with both hands. I'll study English hard to be a ceremony staff. I hope more and more people will try volunteer works. 【マッピングの記述内容】(順不同) ・smile-keep ・落ち着く ・hard works ・with both hands
--

本単元での学習を通して、ボランティアの意義を深く考え、「自分事」として捉えて、自分たちができるボランティアについて、多くの生徒が英語で表現できるようになったことをみとることができた。

また単元前後の「ボランティアをする際に、あなたが最も意識すべき事は何ですか?」の問いに対して、生徒Aの事後の記述に、『自分のやっているボランティアは、どういう工夫をしながらやると、スムーズに、そして他の人も気持ちよくできるのかよく考えて行動する』など、授業者が事前に想定していた解を満たす内容が多く見られた。質の高いコミュニケーション能力に関しては、生徒A・B共に、相手意識をもった英語表現をするために、OREO(O:Opinion 意見、R:Reason 理由、E:Explanation, Example 説明、例など、O:Opinion 結論)ライティングの形式に当てはめながら、ルーブリックに示されている基準を満たし、論理的で分かりやすい、まとまりのある英文を書くことができていた。

(5) 実践の考察

① 授業前後の変容(ワークシートから)

生徒の事前のアンケートに書かれた記述内容と、事後のパフォーマンステスト時の記述内容を、ワークシートをもとに比較する。以下は、2名の生徒の変容である。また、本時のグループ活動時におけるマッピングに書かれていた記述内容についても記載しておく(表7)。

表7 記述内容の比較(授業前後)

生徒	授業前後の生徒の記述(原文ママ)
生徒A	【事前】 I want to do operational support staff. Because I like behind-the-scenes staff. And I think need for staff help too. It is important, it is concerned with events and player. So, I want to do operational support staff.
	【事後】 I want to be an operational support staff. Because I think support of the staff is important too. Operational support staff is very important. So, I will make an effort to operate the works smoothly. And I will make an effort to do things with a smile too. I will have a good cooperation with staff who are in the different category. I want to do this volunteer, so I'd like to learn about the Olympic games. 【マッピングの記述内容】(順不同) ・どの会場のスタッフも案内が少しでもできるように ・スムーズにできるように仕事の内容を把握 ・おもてなしの心 ・楽しく-smile ・自分で考えて行動
生徒B	【事前】 I want to do ceremonies staff. Because I can talk face to face with atheles. For example, Ms. Ikei Rikako atheles. So, I want to do ceremonies staff.
	【事後】 I want to be a ceremony staff. Because I can

② 授業デザインの振り返り

本実践では、「国際協力」という大きなテーマを「自分事」として捉えさせ、いまの自分たちにできるボランティアについて英語で書くパフォーマンステスト課題につなぐ指導計画を設定した。活動時における「問い」はもちろん、ルーブリックの提示、ローテーションによる共有などを工夫することにより、生徒は友達の意見などを取り入れながら、事前の自分の考えを発展させ、課題にじっくりと取り組むことができた。

③ 実践を踏まえた授業の改善点

本単元は関係代名詞についての学習を行う前に、パフォーマンス課題とルーブリックを提示した。今回提示したルーブリックでは、『関係代名詞を用いた文を含む』という文法などの形式面が混在したものとなっていた。生徒が文法項目を単に学ぶだけではなく、自分の表現したいことと学習内容を結びつけながら意見表明ができるように、評価項目を内容と英語表現(文法等)に分ける工夫が必要である。

V 成果と課題

1 成果

今年度の研究の成果は、以下の3点が挙げられる。

1つ目は単元構想において、「答申」の外国語科における「見方・考え方」を踏まえて、単元レベルでの「見方・考え方」を設定した。それを基にパフォーマンス課題を設定し、それを評価するためのルーブリックを作成した。そのルーブリックをパフォーマンス課題に先駆けて生徒に示すことで、生徒が自分の学習について、何を発展させ、何を改善すべきかを考えて、学習に取り組ませることができた。

2つ目に、単元学習前後で自己表現をさせ、それを比較することで、各単元における学びによる成長を生徒自身が実感させることができ、また同時に教師自身の指導の振り返りができ、指導と評価の一体化を実践することができた。

3つ目は、「CAN-DO Check sheet」にて生徒と共有しながら授業づくりをしていった結果、それぞれの学年において、生徒は友達の見などを取り入れながら、事前の自分の考えを修復、発展させ、最終的なパフォーマンステスト時のアウトプットにおける質の高さの向上につなげることができた。

2 課題

今年度は、「生徒の学び具合のみとり」において、深く考えた結果、外化された成果物の評価だけではなく、思考過程に視点をおいた評価についても研究を進めた。

思考過程における「思考」のみとりでは、生徒同士による「気づき」を引き出しにくい場面が見られたことが課題として挙げられた。それは特に英語学習年数が短い1年生に多く見られ、学習課題に取り組もうとする意欲はありつつも、伝えたい内容を英語で表現するための十分な語彙や構文を持っていないということに起因すると考えられる。

最終的に優れたアウトプットを成立させるためには、それを可能にさせるインプットが必要である。そしてそれは生徒の「気づき」を促すようなものでなければならない。つまりアウトプットの前段階の仕掛けが必要である。その一助として、前研究の知識構成型ジグソー法を取り入れることによって、内容面でも表現面でも有効なインプットにつながるのではないかと考える。

また、深く考えた結果外化された成果物の評価においては、パフォーマンス課題を設定し、ルーブリックを提示した。しかし、そこでみとるべき能力が発揮されているかどうかを正確に評価するルーブリックができたかには課題が残った。

成果の中でも述べたように、今年度は単元レベルでの「見方・考え方」を設定した。生徒には、各単元において文法事項を単に学ぶのではなく、自分の表現したいことと学習内容を結びつけながら意見表明させる必要がある。その能力が発揮されているかを評価するために、場面の設定はもちろん、ルーブリックにおける評価項目も内容と英語表現の2つに分ける必要がある。これらによって、文法や論の流れなどの形式面だけではなく、自分の考えが文章に表れていることが重要であることを、生徒にも明示することができる。

VI 本研究3年間の総括

本校英語科が目指している質の高いコミュニケーション能力や目指す生徒像を達成するために、管(2017)がまとめた「状況や相手に合わせて、総合的に考え、臨機応変に対応できるようにする」という、外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を意識した授業づくりをしてきた。

図2は、山田(2018)の「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」のイメージ図を元に、筆者が作成したものである。図では私たちが特定の話題についてコミュニケーションを図ろうとする際に、2つの「見方・考え方」を働かせていることが分かる。まず外国語や、言語の背景にある文化を捉える際に働く「見方・考え方①」。そして伝え合う際に、目的や場面、状況に応じて伝えたい「内容」や伝えるための「言語材料」つまり英語について思考・判断するために働く「見方・考え方②」の2つである。

本研究では、「内容」と「英語」の両者を思考・判断する「見方・考え方②」を働かせる授業づくりにおいて、アクティブ・ラーニングの視点を取り入れた、深い学びにつながる授業実践を行ってきた。

これから求められる授業改善について、山田(2018)は、2つのポイントを挙げている。それは、「自分の考えや気持ちを伝え合う対話的な言語活動を重視すること」と、「話すこと [やり取り] の言語活動に確実かつ

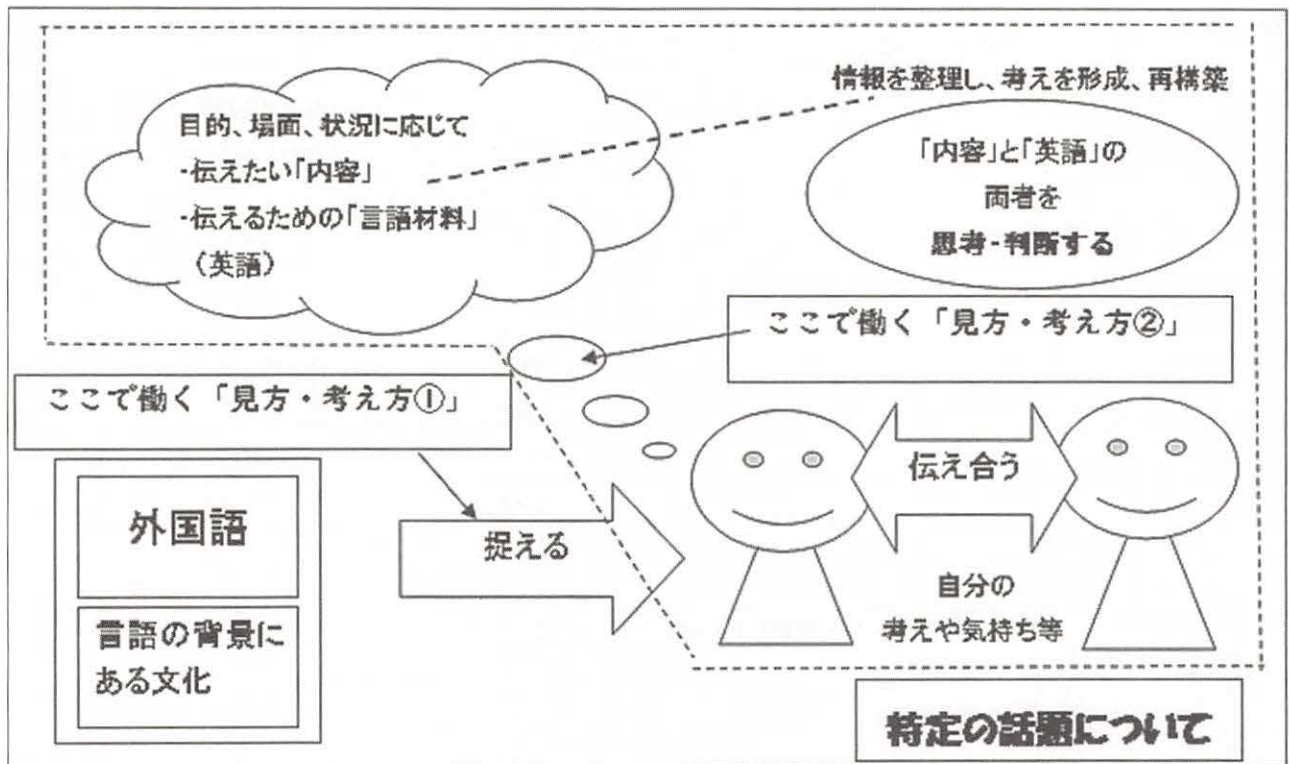


図2 「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」(イメージ)

継続的に取り組ませる」ことである⁶⁾。

ポイント1つ目については、日頃の授業や、BIG QUESTION を提示する際に、What do you think? Why?などと生徒に問い、気持ちや考えを持たせ、それを英語で表出する機会を継続的に与えてきた。そのために、教師自身も自分の気持ちや考えを英語で生徒に伝えることで、最終ゴールとなるモデルなどを示した。

また、自分の伝えたい思いや考えを英語でどのように表現するとよいかを、教師が教えるのではなくて、生徒に考えさせる必要がある。そこで本校では、思考力、判断力、表現力を育てるために、表現する「内容」に加え、その「内容」を表現するための「英語」を自分で考えたり選択させることを行ってきた。

ポイント2つ目について、ある程度の即興性が伴う「話す」という行為は難しく、生徒自身も慣れていない可能性が高い。そのために、週に4時間ある授業の中で、単元構想などを考慮しながら、帯活動や small talk などを工夫して取り入れてきた。今後も言語活動を確実かつ継続的に取り組ませる必要がある。

本校英語科で取り組んできた3年間の研究と実践は、これから求められる授業改善の視点を踏まえた内容とも合致していたのではないだろうか?学んだことの意

味づけを行ったり、既習の知識や経験と、新たに得られた知識を言語活動につなげ、思考力・判断力・表現力を高めていくことを目標にして、今後も研究を進めていきたい。

引用文献・参考文献

- (1) 中学校学習指導要領総則(平成29年3月告示) p.19-20
 - (2) 前掲(1)第9節外国語、p.144
 - (3) 琉球大学教育学部附属中学校『研究紀要』第30集、2018年、p.107
 - (4) 中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)』(平成28年12月21日)、p.26
 - (5) 前掲(4)
 - (6) 管正隆『中学校教育課程実践講座』、ぎょうせい、2017年、p.16
 - (7) 前掲(2)、p.150-151
 - (8) 山田誠志「中学校の英語はこれからどうなる?どう指導すべき?」『英語教育』2018年12月、p.10-11
- ・西岡加名恵・石井英真『Q & Aでよくわかる!見方・考え方を育てるパフォーマンス評価』、明治図書、2018年

Ⅶ 資料

表8 外国語科における学習過程（答申2016、p.197を参考に作成）

プロセス		学習活動	三つの視点の位置づけ (太字下線は本校英語科が取り入れている活動)
目的の設定・理解	最終到達目標（単元ゴール）の理解・把握	<ul style="list-style-type: none"> ・学習する内容についての全体像を把握し、最終到達目標を理解する活動 	<p>【主体的な学び】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○生徒の学ぶことに対する興味や関心の喚起 ○身の回りのことから社会や世界との関わりを重視した題材を設定 ○教員が生徒と学習到達目標を共有 ・BIG QUESTIONの提示 ・CAN-DO check sheet「学習前の考え」の記入 ・事前アンケートの実施 ・ルーブリックの提示
目的に応じた発信までの方向性の決定・言語活	単元ゴール達成のための理解	<ul style="list-style-type: none"> ・言語材料について理解したり練習したりする活動 ・互いの考えや気持ちを伝え合う活動 	<p>【対話的な学び】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○意見や考えを交流させる場面の設定 ○学習形態の工夫 (相手を換え、対話させる機会を増やす) ○コミュニケーションを行う目的・場面・状況に応じて、他者を尊重しながら対話が図られるような言語活動を行う学習場面を設定 ・ギャラリーウォーク ・ピア・フィードバックシート ・知識構成型ジグソー法
目的実現のための言語活動 「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」の統合型	単元のゴール達成に向けての練習	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションを行う目的・場面・状況に応じて、他者を尊重しながら対話が図れるような活動 	<p>【深い学び】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○既習内容を関連付けさせて解決していく意識の喚起 ○「見方・考え方」を働かせて思考・判断・表現させる場面の設定 ○アウトプットを目指した統合的な言語活動の設定 ○目的・場面・状況を明確にした、実際のコミュニケーション場面に近づけた言語活動の設定 ・OREO writing ・マッピング ・パフォーマンステスト
言語・内容の両面におけるまとめと振り返り	単元の振り返り	<ul style="list-style-type: none"> ・話して伝えたことをより正確に書く活動 ・受信したことや発信したことを整理する活動 ・自らの学習のまとめを振り返り、次の学習につなげる活動 	<p>【主体的な学び】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○言語面や内容面での振り返りを行う場面の設定 ○次の学習につなげる意識をもたせる場面の設定 ・CAN-DO check sheet「学習後の考え」の記入
	単元のゴールとなるアウトプット活動	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じた言語活動 ・知識やその知識を実際のコミュニケーションで運用する力を実際に活用して、情報や自分の考えなどを書いたり話したりする活動 	